

Kanagawa Library Association

巻頭言 図書館とわたし	1
特集：鎌倉市図書館振興基金について	2~3
研修レポート「国立国会図書館見学」	4
連載：わたしのイチオシ「柳田國男『生れる言葉』」	4

図書館とわたし

神奈川県図書館協会会長
神奈川県立図書館長
神奈川県立川崎図書館長 高橋創一

平成27年6月から神奈川県図書館協会会長に就任いたしました神奈川県立図書館と川崎図書館の館長を兼務する高橋と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、協会加盟の図書館数も過去最大の134館となり、そこで働く職員数も925名に及びます。本県は人口910万人を超え世帯数も400万世帯になります。この数字は全世界的に見れば、北欧のスウェーデン一国の総人口を上回るものです。また、経済力指数でもあるGDPも神奈川県内では、オーストリア、タイなど国家レベルに匹敵する総生産額を産出し、多くの人々による経済活動の中で強い生産性を誇っています。

こうした国家規模に及ぶ神奈川では、図書館においても多くの利用者からの多種多様な求めに対応する必要があります。そうした中で一地域の図書館ということだけではなく、柔軟性や戦略性を持つ多彩な図書館像を描きながら館運営に当たることも必要ではないかと考えます。

私の図書館との出会いは、小学生のときに「青少年図書館」が開館しそこへ足を運んだことから始まりました。新刊の香り漂う中で、多くの図書があることに圧倒された思いがありました。その

事が契機となって学校内の図書館を利用し、読書の習慣が身についたことは幸運でもありました。大学図書館では、貴重な文献に接し感動を覚え、卒業論文を執筆するために専門図書館で文献を探しつづけた時期もありました。

これまで行政の中では、総務部門・企画部門などでの勤務が続き、今般初めて、図書館に勤務することになりました。遅まきながら図書館という「知の宝庫」をどのように活用し展開していくか考えるときに「青少年図書館」との出会いで、明るく整然とした秩序の下に図書が並ぶ光景を見て凄いと感動した記憶が甦りました。そして、そのときに感じた利用しやすさが大事だという基本的なスタンスが思い起こされました。

いまや、インターネット通信網が発達し情報の入手手段は便利になりましたが、文字活字文化に立脚した図書館の重要性は聊かも揺ぎ無く、自らが利用者の目線で図書館を見つめ、利用者にとっての利便性をいかに向上させ満足を得ていただけるか思案する毎日であります。

これからも多くの加盟の皆様のご協力をいただき、明日の図書館づくりに邁進したいと考えています。今後とも、お力添えをお願いいたします。

特集：鎌倉市図書館振興基金について

鎌倉市図書館で平成 23 年 10 月から導入実施している「鎌倉市図書館振興基金」について、導入経緯と内容、そして当館での課題等をご紹介します。

【基金導入の経緯】

平成 23 年 7 月 20 日、当館が開館百周年を迎えるにあたり、平成 18 年度末から公募市民と図書館職員で開館百周年記念事業準備委員会を立ち上げて各種事業の計画準備を進めましたが、事業の一つ『鎌倉図書館百年史』を編纂していく中で、当館が初代図書館開館から二代目図書館開館、軍の接收から再開した際等、節目において町民市民の絶大なる協力によってなりたってきたことが明らかになりました。そして昨今の財政状況から予算的に非常に厳しい「今」もまた市民の協力を得るべき時ではないか、鎌倉に関する貴重な資料を購入等するための基金を作ったらどうか、と公募委員から提案されたことが導入の発端でした。

提案してくださった市民公募委員が所属する NPO「図書館とともだち・鎌倉」によって、市長・教育長はじめ市議会議員一人一人へのロビー活動が行われ、正直当初基金設置に少し消極的だった図書館としても引くに引けない状況になり、提案者等と協議しながらその内容を詰め、基金設置へ議案を上程、平成 23 年 9 月議会にて「鎌倉市図書館振興基金条例」が可決されたのでした。

【基金の内容】

■ 目的 ■

郷土資料をはじめとする貴重な図書館資料、具体的には備品(10 万円以上)として扱われる、

- ① 鎌倉を主題とした古絵図、古地図、錦絵等の古典籍類
- ② 鎌倉在住の著名人の蔵書や署名入りの著書等
- ③ 鎌倉を主題とした近現代を知るための紙資料等
- ④ 鎌倉の近現代の古写真等
- ⑤ 鎌倉を主題とした近現代の視聴覚資料等
- ⑥ その他鎌倉ゆかりの図書資料等

の収集、保存及び保管並びにそれに要する図書館設備の充実その他図書館事業の振興を図るための財源に充てることを目的とし、設置しました。

■ 基金の受付方法 ■

基金の受付方法は直接現金での募金、または金融機関等での振込、の二通りです。

募金の場合は、市内 5 図書館のカウンターに募金箱を設置して受付けています。

振込の場合は、専用振込用紙を使い、市役所・支所の窓口の他、指定金融機関（市内に本支店がある横浜銀行・スルガ銀行・三菱東京UFJ 銀行・三井住友銀行・湘南信用金庫・東日本銀行・りそな銀行・みずほ銀行・さがみ農業協同組合・静岡銀行・中央労働金庫・三浦藤沢信用金庫）で受付けています

金額は振込の場合、「個人一口 1 千円、団体・法人一口 1 万円を目安としていますが、額はおいくらでも結構です。」と案内しています。

この寄附金は、ふるさと納税扱いとなります。市外の方は 1 万円以上、市民は 3 万円以上の寄附で額に応じた地域特産品が贈呈されます。



(募金箱と専用振込用紙を挟んだ案内ちらし)

■ 基金の受付実績 ■

基金を設置した平成 23 年 10 月から本年 7 月末までの基金の実績は次の表の通りです。

年度	募金箱	振込 (個人)	振込 (団体)	利子	計	累計
平成23年度 *10月1日～	5,269	94,000	21,122	0	120,391	120,391
平成24年度	137,170	450,000	91,000	20	678,190	798,581
平成25年度	107,532	973,200	94,000	659	1,175,391	1,973,972
平成26年度	69,159	198,000	70,000	3,846	341,005	2,314,977
平成27年度 *7月31日迄	81,450	200,000	10,000	0	291,450	2,606,427
計	400,580	1,915,200	286,122	4,525	2,606,427	*平成23年10月1日～ 平成27年7月31日迄

■基金の使用■

基金を使用する際には、その内容が当該目的に適合するものかについて、中央図書館長からの諮問により、図書館協議会において審議することになっています。

当館の場合、図書館協議会は年4回の開催であるため購入したい資料を見つけてから実際に購入するまで最短で約半年、タイミングが悪いと1年以上かかってしまうことになります。また購入提案した資料が「不可」となる可能性もあるため、古書業者等との信頼関係を築いておく必要があります。当館では現在、市内業者1店、県内業者2店、県外業者1店の計4店に情報提供等を依頼しています。

■基金のPR方法■

基金のPRとしては、基金設置時に市の広報や図書館だよりに掲載したこと、現在は館内に案内ちらしや案内パネルを掲示、図書館のホームページに基金のページを作っていること、ふるさと納税の関連で市役所ホームページにも案内があります。

しかし、それら従来どおりのPRは全て「見て読んでもらって行動してもらおう」待つPRです。今回の基金ではより積極的に「攻めのPR」とも言える「個別訪問」(商店等)を実施しているのが特徴です。前掲NPOのメンバーが訪問の予約等をし、当日図書館員も同行して寄附をお願いするものです。訪問先は商店や文化人が多いように感じます。訪問した方からご友人の紹介をされることも度々あります。また訪問した方は、その場だけでなく次年度にも下さる方が多いのも特徴だと思います。

またPRを兼ねた実績状況の報告や、購入した資料の展示会を開催するのも有効だと考え、

今年10月に「お披露目展示会」を開催する予定です。その際、連絡先の方振込者、団体には案内状を出し、教育長から感謝状を手渡す予定です。



(平成27年度に購入した鳥瞰図の原画)

【今後の課題—当館の場合—】

現在考えられる課題は以下の4点です。

- ① 条例可決の際の附帯意見で、寄附金の推移を見ながら将来的には一般財源からの繰り入れを検討すべきと言われていること
- ② 候補とすることができるのが10万円以上の資料であること(ハードルの高さ)
- ③ 高価な資料であるため、候補資料の真贋と価格の正当性の説明が必要であること
- ④ 購入した貴重資料を保存するための設備の充実が必要であること

上記等の課題はあるものの、予算厳しき折柄、今まで涙を飲んで諦めざるを得なかった、というより、はなから購入対象と考えることが出来なかった貴重かつ高価な郷土資料を購入検討することが可能となったことは、大変ありがたいことです。

基金設置にあたりダメ亭主の尻を叩いて、いや背中を優しく押してくださったNPOの方々と、基金にご協力いただいている沢山の方々に感謝する毎日です。「案ずるより産むが易し」を実感しています。貴館も導入を検討されてはいかがでしょうか。
(鎌倉市中央図書館 中田孝信)

6 月 30 日 (火)、「国立国会図書館 東京本館」の見学研修を行いました。

はじめに、「国立国会図書館電子情報サービスについて」の講義がありました。主に、国立国会図書館ウェブサイトで開催しているサービスについての説明でした。参考資料の内容や目次からキーワード検索ができるなど、レファレンスで活用できるサービスが充実していることがわかりました。また、「電子展示会」では、デジタルアーカイブ等を使いウェブサイト上でテーマ展示を行い、「歴史的音源」では、音楽や効果音、自然音のデジタルアーカイブが視聴できるそうです。例として、『赤い靴』『ラジオ体操』『嵐を呼ぶ男(石原裕次郎)』『森の白兔(村岡花子朗読)』を試聴しました。

休憩を挟んだ後、国立国会図書館の沿革についてのDVDを試聴しました。国立国会図書館は、貴族院図書館・衆議院図書館・帝国図書館を源流として1948年(昭和23年)に開館。国会に対するレファレンスと、納本制度に基づき国内の出版物を収集・保存する役割を担っているそうです。

続いて、館内見学を行いました。まずは、本館2階利用者入口で館内の様子を見学。次に、専門資料室と閲覧室、複写カウンターを見学しました。複写カウンターでは、何十台も並ぶコピー機で、絶えず複写を行う様子が壮観でした。続いて新館2階雑誌カウンターで、閲覧申請のあった資料の運搬を見学しました。そしていよいよ、地下書庫8階へ。書庫に入る際は、カビ菌等の侵入を防ぐため、靴にカバーの装着が義務付けられているそうです。書庫は空いている書棚が目立ちましたが、いずれも配架する資料が決められており、所蔵能力の限界に達しているとのこと。書棚の配置を見直すことで、資料の置き場所を確保している状況だそうです。書籍以外にも、マイクロ資料や業界向け雑誌など、地方の図書館では見られない資料が多く並んでいるのが印象的でした。

今回の研修では、電子情報サービスや複写サービス等、普段の業務で活用できるサービスを知ることができました。学んだことを持ち帰り、ぜひ活用していきたいと思います。

(綾瀬市立図書館 百瀬茉莉奈)

連載：わたしのイチオシ「柳田國男『生れる言葉』」

(県立神奈川近代文学館)

戦後間もなく発行された児童雑誌「赤とんぼ」。1946年8月号に、日本民俗学の創始者として知られる柳田國男(1875~1962)は「生れる言葉」と題した一人称の代名詞についての考察を掲載しました。当館の藤田圭雄文庫にその原稿が収蔵されています。

「ボクといふ代名詞、人が自分のことをボクといふ日本の言葉は、今にきつと使ふ人が無くなるであらう」という一文から始まり、「ワ」から派生した日本の言葉「ワタクシ」に対し、柳田が好まない濁点を含む「ボク」が、少年たちを中心に、普段口語として用いられている現状を言葉の濫用と憂慮しました。

また文中では、この「ボク」という言葉が、もともと中国で「下僕」を意味するものだったことや、日本ではかつて、謙譲語のひとつとして主に書き言葉に使われることがあったことなどにも触れ、代わりの新語の発生を望んでいます。

最後は「少年は自ら正しい選択をして、未来の国語の美しさを作り出さなければならぬ」と締め

くくり、美しい言葉を選び残していくことの大切さと、言葉を発するときには、その由来まで考察して、自ら判断した上で使用することの重要性を訴えました。

この原稿は、当館で今秋開催する「生誕140年 柳田國男展 日本人を戦慄せしめよ」(10月3日~11月23日)で展示します。ぜひご覧ください。

(県立神奈川近代文学館 林枝美里)

